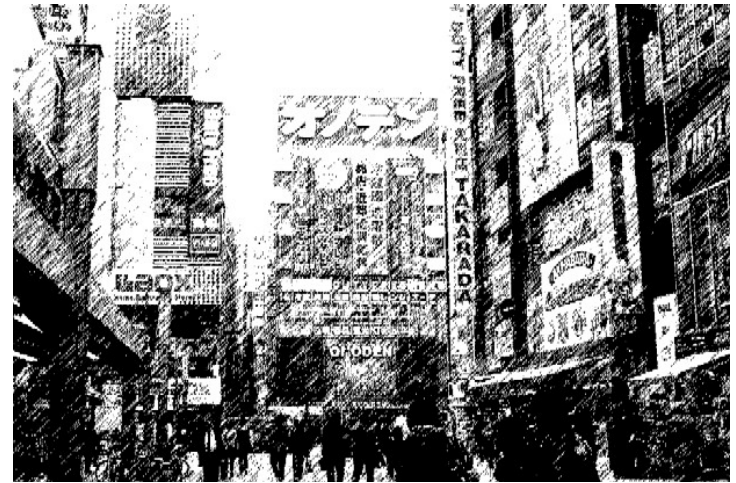


「プロメテウス・トラップ」お楽しみ企画！

パンドラ

in

秋葉原



TEXT BY 福田和代

「キタ

」！

ビルの間からのぞく青空に向かって、パンドラは右手の握りこぶしを高々と突き上げ、叫んだ。何事かとこちらを振り返る人々の視線や、くすくす笑いながら指さして通り過ぎる制服姿の女子高生たちのことは、気にしない。これが叫ばずにいられるか。路上に座り込んでいる少年たちまでが、妙なガイジン、とへらへら笑いながらこちらを見ている。そうだ、ボクはガイジンだ。つい昨日、アメリカからこちらに着いたばかりだ。

とうもろこしのひげみたいで明るい色の金髪に、そばかすだらけで子どもみたいな白い肌。どうせ、絵に描いたようなヤンキー青年だと思われているのに違う。

カラフルな看板。あちこちの店から聞こえてくる、ポップな電子音。店頭飾られた、とびきり目の大きな、アニメのキャラクターを模した人形たち。街を行きかう、まるでアニメーションの世界から抜け出てきたような、ゴシックな服装に身を固めた少女たち。明るい笑みを浮かべて、メイドカフェのチラシを配っている、おそろいのメイド服の女の子たち。ピンクや緑色の髪。わくわくしてくるじゃないか。

パンドラの足は自然に早くなり、やがては街を駆けだしていた。

何しろ、夢にまで見た街 秋葉原なのだ。

天才ハッカー プロメテウス こと、能條良明の急な誘いを受けて、日本にやってきたのはつい昨日のことだった。航空券の費用は、ノージョー持ち。ノージョーのマンションに転がり込んでいるから、宿代もいらぬ。滞在日数が短いことだけが心底残念だったが、そのぶん興奮は増すというものだ。今日一日は、秋葉原で自由行動。明日にはまた、ロスに向かう航空機に乗り込む予定だ。

ノージョーは最初、秋葉原を案内してくれると言っていたが、計画の準備に時間をとられているのと、あれこれ話しているうちにどうやらパンドラのほうが秋葉原に詳しいのではないかと自信を失ったようで、結局パンドラはひとりで街に出てきたというわけだった。

何しろ、ロスにいる間に、インターネットの情報網を駆使して、秋葉原事情を底の底まで探ってきたのだ。

『電子のアイドル マジカル・チーボー』のポスターは、キャン・カフェで販売中！)

『あいラブ だーりん』のまりりんちゃんの等身大フィギュア、売ってないけどどこなら見れる！)

(メイドカフェに行きたいけど？ それなら『ミコミコ』にしとけ！ 美少女度、高し！)

(どこに行っても、ぜったい気に入るって、おまえなら)

アニメおたく仲間の中には、日本の美少女アニメを熱愛するあまり、シリコンバレーの職を投げうって、東京のIT企業に勤務し、休みのたびに秋葉原に入りびたっているような連中もいる。そういう連中とネットで情報交換し、この一日を有意義に過ごすためのタイムチャートを、パンドラはしっかり作成していた。買い物リストも完備だ。ポスターやTシャツ、フィギュアなど、おそろ

くここでしか手に入らないと思われるレアな商品を思う存分に購入して、ロスに郵送するつもりだった。東京に来るといふパンドラを、ぜひ案内したいと言ってくれた仲間もいたのだが、パンドラが平日の一日しか時間がとれないという事情もあって、さすがに仕事の都合がつかなかったようだ。ちなみに、彼らと会話する時には、ポール・ラドクリフという本名を使うことにしている。

(ああ、いい街だなあ)

パンドラは買い物メモを握りしめて、深々と息を吸い込んだ。秋葉原。 おたくにとっては聖地だ。ここに来ることができただけでも、自分はなんて幸せなんだろうか。ジャパニーズアニメのグッズが手に入るだけではない。アキバといえば、日本でも有数の電気街でもある。コンピュータの専門家でもあるパンドラにとっては、これほど有意義に時間を過ごすことができる街は、他にないだろう。

朝早くから昼過ぎまで歩き回って、ポスターだのフィギュアだのトレーディングカードだの、米国でまだ発売されていないアニメのDVDだのを持ちきれないほど買い込んで、郵便局から米国の自宅に送り届ける手配をすませる。国内未発売のアニメを見るために、必死になって日本語も勉強した。伊達に元天才少年とは呼ばれていない。今では日常会話には支障がない。

「おなかすいたなあ」

ひと仕事終わるとほっとして、周囲の店を見回した。

そこからハンバーガーでも食べようか。それとも、せっかくの日本なのだから、和食の安くて美味しい店を探すべきだろうか。

きよろきよろと周辺に視線をやりながら歩いていると、ぺらぺらの黒衣着流しにサングラスをかけて、おもちゃの日本刀を腰に差した若い男が、パンドラの手一枚のチラシをすべりこませてきた。拒む隙を与えない、絶妙なタイミングだった。やるなあ、と男の顔を見返すと、日焼けした肌でにやりと笑みを浮かべた。どこか挑戦的で、意味ありげな笑みにも見える。

手の中のチラシに視線を落とす。

「あれ」

白紙だ。薄い緑色の用紙なので、白紙というよりは緑紙とでもいうべきか。裏を返して確かめてみたが、やはり何も書かれていなかった。

「なんだ。白紙が混じっていたのかな」

そのまま立ち去りかけて、何となく気になり、パンドラは引き返した。さっきの男がまだチラシを配っている。知らないふりをするもう一枚受け取るうとしたのに、今度は男のほうのパンドラを無視した。既に一度、渡した人間だと覚えているのかもしれない。

（むう、なかなか手ごわい）

パンドラは少し行きすぎたところで立ち止まり、唇を噛んだ。

白紙だったと告げて、一枚もらおうか。しかし、なぜ自分がそこまでしななければいけないのか。たかか路上で配布しているチラシ一枚を受け取るために、男に頭を下げなければいけないのか。

振り向くと、サムライ男もこちらを見ていた。サングラスのせいで目つきは読めないが、まるで非難するような顔つきだった。

（な、何か僕が悪いことをしたみたいじゃないか！）

むかつ腹を立て、今度こそ無視して通りすぎようとしたパンドラは、路上に重なって落ちているチラシに気がついた。男からチラシを受け取った人々が、捨てていったものらしい。もちろん何か印刷されている。文字まではよく見えないが、どうやらメイドカフェのチラシらしい。

ところが　パンドラは、路上に散るチラシの色を見て愕然とした。

（ホワイトじゃないか！）

一枚も、緑色の紙なんて落ちていない。これはいったいどういうことだろう。あの男は、パンドラにだけ緑色の紙を渡したのだろうか。

（いったいなんのために）

パンドラはまた男を見やった。もう彼はこちらに意識を向けておらず、最初に見かけた時と同じ軽快なリズムで、通りかかる人々の手の中にチラシを押し込んでいく。じっと観察していたが、やはりチラシの用紙はすべて白色だった。

これは絶対、何かある。

パンドラは周囲を見回した。何か、緑色にちなむ店があるのではないか。あるいは、緑色に塗られたドアでもあるのではないか。

（O・ヘンリーの『緑のドア』みたいだ）

思い出してちよつと苦笑する。あの短篇も、往来で不思議なチラシを受け取る場面から始まるのだ。

じつくりと、手渡された緑の紙を眺めた。どう見ても、ただの紙。暗号が隠されているようにも見えないし、あぶり出しになっているようでもない。

(ひよっとして、LSDの溶液でも塗り込められていたりして)

印刷した紙に、麻薬や覚せい剤の水溶液を染みこませて売るとい話を聞いたことがある。しかし、それなら通りすがりのパンドラに、いきなり手渡す意味がわからない。

男に聞いたとしても、まともな答えが返ってくるとは思えなかった。この暗号を解読できないパンドラを、まるで蔑むような表情をしていたからだ。

なぜ自分にこんな暗号めいたものを渡したのか。パンドラが、MITを主席で卒業した元天才少年だと知っている人間が、秋葉原にいるのだろうか。パンドラに何か言いたいことがあるのかもしれない。あるいは、助けを求めているのかも。

(あ、なんだかわくわくしてきた)

いかんいかん、と能天気にはながら、パンドラはすぐ近くのビルに非常階段がついているのを見つけて、登っていった。着物の男がこの後どんな行動をとるのか、観察してやろうと思ったのだ。

錆の浮いた鉄の階段を、手すり越しに通りを見下ろしながら駆け上がる。三階の踊り場にたどりつく直前に、非常出口の扉が大きな音をたてて開いた。はっとしてそちらを見ると、飛び出してきた人間のほうも、金髪頭の外人がいきなり目の前に立ちふさがったように見えたのか、仰天した顔で悲鳴を上げた。

「どいて！」

そんな、いきなりどいてと言われても。あたふたと狭い階段で立ち往生する。運動神経には、あまり自信がない。相手は黒と白のひらひらしたエプロンドレスに、フリルのカチューシャ、ニーハイソックス！

「メ、メイドさん！」

わずか一瞬でパンドラがそこまで読み取り、うろたえて叫んだ瞬間。相手がダイビングの勢いで飛びかかってきた。悲鳴を上げて足をすべらせ、うつ伏せになって階段をすべり落ちる。

「悪い！」

メイドさんの足が、背中を踏みつけて飛び越えていった。ぐえ、とパンドラは声にならない声を洩らし、文句のひとつも言っつてやろうと頭を上げかけたところに、また三階の非常出口が、ドアが壊れるんじゃないかと思う勢いで開いた。

「あいつだ！ 降りたぞ！」

「逃がすな！」

口々に叫びながら、屈強な三人の男たちが階段を駆け降りてくる。逃げる暇もない。パンドラは頭を抱えて、彼らを通り過ぎるのを待った。背中やら足やら、さんざん蹴られ踏みにじられたが、とりあえず顔と頭は無事。ふらふらと立ち上がり、手足が痛むものの、何とか無事に動くことと、大きな傷がないことを確認して、顔をしかめる。

(何だ今のは！)

あまりにも瞬間的で、殺気に満ちた遭遇だったので、事態を把握するのに時間が必要だった。

「あつちだ！」

三人のスーツ男は、はるか向こうにメイド服の女性を見出したようで、はりきってどたばたと走って行った。

「あーあ。行っちゃったよ」

この秋葉原には、メイドがいたい何人いることやら。思わずパンドラは呟き、よろめきながら階段の裏側に向かつて顔を出した。

「あいつら、行ったよ。キミ、そこに隠れてるんだろ」

白いカチューシャと、茶色の短いポニーテールが覗いている。連中に踏み潰されながら、パンドラは階段を走り降りたメイドさんの足音を聞いていた。非常階段を飛ぶように降り、一目散に道路に向かうと見せかけて、階段の裏に回った。後から降りた三人組は、まんまとその罠に引っかかったらしい。

ひょっこりと顔が出てきた。疑わしそうで、追いつめられたような表情だ。彼女の頭が引っ込んで、また階段を上がってこようとしていることに気づき、パンドラは慌てた。

「ちよつと待った！ どうしてこっちに来るのさ」

「まだ用がすんでない！」

「追われてたじゃないか！」

何がなんだか、わけがわからない。とにかく、あの子をさっさとここから遠くへやらないと、何が起きるかわからないという気がした。メイドさんが上がってくる前にはと思い、パンドラは何とか

動くようになった足で、二段飛ばしに階段を降りる。

「とにかくいったんどこかに隠れよう。話はそれから」

まだ階段を上がる気である彼女の腕をつかみ、駆け出した。さっきの男たちが追跡を諦めて戻ってくる前に、逃げるつもりだ。

*

「いただきます」

ぱしんと音を立てて、割り箸をふたつにする。

そう言えば、自分はおなががすいていたのだった。

そのことに気づいたのは、中央通りを走り出してすぐだった。パンドラはラーメン屋の写真入り看板に猛烈にひきつけられ、メイドさんの手を引いて店に飛び込んだ。ほかほかの湯気がたつ、分厚いチャーシューともやしがつぶり入った、とんこつスープのラーメンをふたつ注文。

「何、あたしの分まで注文してんだよ！」

ラーメンをおごってメイドさんの怒りを買いながら、隅の席に引きこもる。

「だって、さっさと道路から見えない場所に隠れないと。こつち、こつち」

白木のカウンターにメイド服は、かなり目立つなあと思いつながら座らせる。最初のうちこそ、モノクロのメイド衣装は店の主人と客たちの注意を引いたが、秋葉原では珍しくもないのか、そのうち誰もこちらを気にしなくなった。

「玉子の入ってないラーメンなんか、誰が食うもんか。おっちゃん、半熟玉子入れてよ」

「はいよっ」

勝手に追加注文をして、メイドさんの怒りはようやく静まった、らしい。

運ばれてきたとんこつラーメンを、はふはふ言いながら啜り、パンドラはようやく人心地ついて、ここに来た目的を思い出した。人間には優先順位というものがある。食欲には何者も勝てない。

「で、どうしてあんな非常口から出てきたわけ？」

「非常口だったって、あそこは従業員が毎日使ってる入り口なの！」

「従業員って、キミはあそこの従業員？」

「四階にあるメイド喫茶でアルバイトしてる。『天使の卵』って店。三階は芸能プロダクションが入ってるんだ」

「ゲイノウ……？」

単語の意味は理解できても、それは何をやるものかと問いかける視線でメイドさんを見ると、彼女はじつとパンドラの左手を見つめていた。

「そういや、あんた箸の使い方うまいね。左利きだけど。ガイジンだろ？」

後ろでひつつめにした色の淡い金髪を、じろじろと眺めまわしている。

「アメリカ人だって、たまには寿司やら中華やら食べるよ！ それより、キミ、名前は何ていうの？ 僕はパンドラ」

何となく本名を名乗るのは気が引けて、ネットのハンドルネームを名乗ってしまった。

「パンドラ？ それって女の名前じゃないの」

「いって。キミの名前は？」

メイドさんが、一瞬にらむような目でパンドラを見つめた。

「あたしは ミドリ」

ええと、ミドリというのはつまりその。

「グリーン？」

こくり、とミドリがうなずく。その様子が妙に人形めいている。年の頃は十八、九だろうか。アジア人の年齢はよくわからないが、パンドラよりは随分年下のように見えた。よくよく見ると、化粧のせいか目がぱっちり大きくて、口が小さく、まるでアニメに出てくる女の子のようだ。ただかこの子のほうが、モデルみたいだよな、と思う。

それより

(グリーンだ！)

あのサムライ男が配っていたチラシ。パンドラにだけ渡されたい、何も書いていない緑色の紙。

(あの男は、やっぱり何かを知ってたんだ)

ミドリを助けてくれる人間を探して、パンドラに謎かけのように緑色の紙を渡したのかもしれない。秋葉原に渦巻く謎の陰謀。暗躍する秘密組織。悪漢に追われる美少女！

「ちよっと、あんた聞いてんのかよ」

ミドリの不機嫌そうな声に、はっとパンドラは我に返った。なんだか白昼夢に溺れていたような

気がする。心はここになくとも、耳は聞いているわけで、記憶を再生すれば聞こえてくる。

「ええと、三階が芸能プロダクションのワイワイプロモーション。さっきの連中はその社員。女優やモデルを育ててマネジメントするという触れ込みだけど、実際には高い教育費用を払わせて、全然まともな教育を受けさせてくれない、と」

「そう。五十万だよ、五十万。ワイワイプロモーションが経営してるモデルスクールがあって、登録してお金を払い込むと、その生徒になるんだ。ところがそのモデルスクールがいんちきでさ。素人同然の講師が教えてるから、そこで勉強したところで役者としてもモデルとしても、使い物にならないってわけ」

いつきに喋って、ミドリは残ったとんこつスープをぐーっと飲み干した。なかなか豪快な食べっぷりだった。ミドリも空腹だったのだらうか。

だん、と音をたてて鉢をテーブルに置く。

「だけど、一応は授業も受けさせるから、レベルが低いつてだけのこと、詐欺だとも言い切れないと」

「そゆこと」

わかっているじゃないか、と言いたげにミドリが箸の先を振る。

「あたしの親友が　そいつユカリってんだけど　ワイワイプロモーション　の社員にモデルにならないかって勧誘されて、引っかかったんだよ。それで五十万。バイトでこつこつ貯めた金だったのに、それきりばあだよ。ろくな授業じゃないことにすぐ気づいて、苦情を言っ辞めようと

したけど、返金してくれるどころか、妙な言いがかりをつけるなら訴えるって逆に脅しつけられる始末さ。だから、あたしが四階のメイド喫茶に潜入したわけ」

ええと。

パンドラは首を斜角三十度くらいに傾け、両手を大きく広げた。

「意味ガワカリマセン」

「いきなりガイジンになるな！」

塩の瓶が飛んでくる。はっしと掴みとった。

「ていうか、キミの喋り方、ガイジン相手にすつこく早いですけど！　三階の芸能プロに用があるのに、四階に潜入するってわけわかんないし！」

「だからさあ、ちゃんとこれから説明するじゃん。ユカリは最初のうち、プロダクションのことを信用してたわけ。それで、他にモデルになりたい友達がいなかったと尋ねられて、住所氏名のリストをメールで送ったわけよ。ところが、送った後になって、どうもこのプロダクションは怪しいと思いはじめたの」

「それで、つまり、そのメールを取り返したい　とか？」

おそろおそろ尋ねると、こくり。またミドリが人形のように頷いた。

「取り返すっつーか、あいつらのパソコンから消して、利用できないようにしたいわけ。どうせ悪用するつもりなのに決まってるんだから。これ以上被害者を増やしたくないの。それであたしが四階に潜入して、三階の連中の様子を窺って、パソコンからデータを消すか、パソコンそのものを持

ち出そうと思って」

「やばいよそれ、犯罪だよ」

パンドラは慌てて手を振った。

「まさか、さっき彼らに追いかけられていたのって、そのこと？」

ミドリは悔しそうに、左手の親指を前歯で噛んだ。

「あいつら、時々うちの店からコーヒーの出前を取るんだ。今日も電話がかかってきたから、あたしが持つて行くことになって、三階の事務所に入ったらさ　　ちょうど誰かがノートパソコンを使った後だったらしくて、珍しく電源が入って使える状態になってたんだよ」

「でも、あいつらがいたんじゃない、目の前でデータの削除はできないよね」

パンドラの指摘に頷く。

「そうなんだ。だから、そんなまどろっこしいことはやめて、いつそのこと　　と思つてさ。あいつらの事務所に、重さ十キロぐらいの石で彫った熊の置物が飾つてあつてね。そいつを振り上げて、パソコンの上に思い切り　　」

ミドリがパソコンに加えようとしたらしい危害を予想して、パンドラは青ざめた。力がこもりすぎて、震える両手を振り上げかけたミドリが、そこでがっくりと肩を落とした。

「でも重くつてさあ。持ち上げたはいいけど、思わずよろめいちゃって。何をやってると言われて置物も取り上げられて、慌てて逃げ出したんだ」

この子って、けっこう変かも。　　という呟きは飲み込んだまま、パンドラはため息をついた。

親友のためとは言え、友達のためにそこまでできるなんて、変でも何でも、ミドリはいいやつだ。

「コーヒーをぶっかけちゃえば良かったのに」

「え？」

「今どきのパソコン、ちょっと上から衝撃を与えたくらいではなかなか故障しないよ。本体が壊れても、ハードディスクが壊れてなければ意味がないしね。キミ、コーヒー持つて行つたんだよ。

だから、パソコンにコーヒーをぶっかけたら良かったんだよ。よろめくふりして、あっ、ごめんですむしさあ。ほぼ確実に、故障する。コーヒーより、べとべとしたジュースなんかのほうが、な

おいしい」

「そうなの？」

ミドリが啞然としている。

「故障しても、ハードディスクまで浸水してなければ、ハードディスクを取りはずしてデータをサルベージすることもできるかもしれない。だけど、彼らが自分でやらずに業者にそれを任せるのなら、業者に渡った段階で事情を説明して中身からリストを削除してもらつても可能かもしれない」

パンドラの説明を聞いて、ミドリはがっかりした様子だった。最初からその話を聞いていれば、と思つたのだろう。

「あんたつてさあ、けっこうワルじゃない？」

しみじみと呟くミドリに、パンドラは慥然とする。

「キミに言われたくない」

「もう、あたしは三階に入れないよ。それどころか、たぶんうちの店だって辞めさせられる」
「それはもう、危ないから絶対に辞めるべきだよ」
「だよねえ」

「はああ、とミドリがため息をつく。どうして自分は日本くんたりまでやってきて、憧れの秋葉原で逆上したメイド少女にパソコンを壊すための心得を伝授したりしているんだろうか。パンドラは内心で首をひねりながら、ミドリに尋ねてみる。」

「四階のお店でアルバイトする時、本名とか連絡先、教えてる？」
「ミドリはぶんぶんと首を横に振った。」

「学生証を見せて身分を証明する必要があったから、名前は本名だけど、連絡先は嘘を書いちゃった。だから、ワイワイプロモーションのやつらがバイト先に苦情を言っても、家までは行き着かないよ」

「でも学生証を見せたつてことは、大学の ええと、教務課？ に聞けば、わかってしまうんじゃないよ」

「まさか。生徒の個人情報なんて、うかつに教えたりしないよ」

「それじゃ、そっちのほうはひとまず安心か」

「後は、パソコンの中のリストだ。ミドリの話を聞く限りでは、若い女性の夢を食い物にするような、えげつない商売をする連中らしい。それが本当なら、パンドラとしてもちよつとばかり制裁を加えるにやぶさかではないのだが。」

「じゃあ、ちよつと教えてもらおうかな。ワイワイプロモーションにあるパソコンつて、ひよつとしてそれ一台だけ？」

「そう」

「それじゃ、そいつがインターネットにもつながってるよね」

「知らないけど いや、確かケーブルがついてたと思う」

「ミドリが思い出そうとするように、目を細めた。」

「パンドラは脇に置いてあったショルダーバッグから、モバイルパソコンを取り出した。日本でもインターネットが利用できるように、しっかり契約をすませてある。ネットのない環境では、一日たりとも生きられない。ネット中毒という言葉が一時期流行ったが、それとも少し違うとパンドラ自身は考えている。たとえばそれは、酸素のようなもの。酸素が消えなくなれば誰も生きていくことはできないが、だからって酸素中毒だとは、誰も言わない。パンドラにとつてのネットは、そういうものだ。」

「目を丸くしているミドリの前で、ワイワイプロモーションのホームページが存在し、連絡先メールアドレスも掲載されていることを確認した。」

「オーケイ。それじゃミドリ。ちよつと時間がかかるから、この場では無理だけど、後で僕が、そのパソコンのデータを消しておくよ」

「ミドリが目をぱちくりさせた。そうしていると、意外とかわいいかもしれない。」

「どういふこと？」

「うん　まあ、ちゃんと説明すると長いんだけど。簡単に言うと、メールを使って彼らのパソコンにウイルスを送りこんで感染させる。後はウイルスがデータを勝手に食いつぶしていく。ホントはリストだけ選んで削除すればいいんだろうけど、そんなことをすれば、犯人が誰だかわかっちゃうからね。全部消すんだ」

「そんなことできるの？　あんたが？」

「確実にできたかどうか、確かめようなんて気を起こさないでくれたらね」

本当に削除されたかどうか確認するために、また三階の事務所に侵入したりされたら　今度こそ、警察に突き出されるかもしれない。しかもその時は、パソコンにウイルスを送り込んだのは誰だという話になる。ウイルスを送り込むのも、間違いなく犯罪だ。

（やっぱり、かなりマズいよなあ。たとえ、僕自身はもうすぐロスに戻るとは言っても　）
それでミドリが犯罪者になったりすれば、寝覚めが悪いつたらない。

「でも　あなたの言葉だけで、それができたかどうかなんてこと、あたしに判断つかないじゃないか」

困惑したように言うのももつともだ。パンドラは頷いた。

「それじゃ、こうしよう。ウイルスがデータを削除し始めたら、キミにメールを飛ばすように設定しておく」

「削除が終わったら、じゃなく？」

「終わっちゃうと、たぶんもうメールとか飛ばせなくなってるからね」

その時、パソコンは集積回路なんかが詰まった、ただの箱になっている。
なるほど、と口の中で呟きながらミドリが頷いた。

「わかったよ。それで手を打つ」

「それじゃ、キミのメールアドレスを教えてください」

ミドリがちょっと黙り、目を瞬いた。なんだか頬が赤いような気もする。がんばりすぎて、熱でも出たんだろうか。

持ち歩いている手帳にペンを添えて渡すと、几帳面な文字でアドレスをしつかり書き込んだ。手帳とペンを返すと、彼女は何か言いたそうに、パンドラの目を覗きこんでいた。

やがて、小さくため息をついて、すつくと立ち上がった。

「ありがとう、パンドラ。あたしたち、すつごく助かったよ」

ミドリが握手を求めるように、右手を差し出している。頭にはフリルのカチューシャ、ぼんとふくらんだパフスリーブに、ひらひらのたつぷりついたエプロンドレス。

（メイド服、板についてるよなあ）

パンドラは軽くミドリの手を握り返した。

店を出て、ミドリがメイドの衣装のまま去っていくのを見送った。思いがけないことで時間を食って、いつのまにか太陽が西に傾いている。真夏だからまだ明るいけど、時計を見ると午後六時を過ぎていた。

しまった、せっかく秋葉原のメイドさんと仲良くなったのに、一緒に写真を撮影しておけば良か

った。そしたらみんなに自慢できたのに！ ああああ。
そんなことをふと考え、あっと気がついた。

「ミドリのファミリー・ネーム、聞きそびれちゃったな」

それどころか、自分の本名さえも名乗っていない。手のひらに握りこんだ手帳に書かれた、メルアドレスに目を落とす。

（連絡　してみようか）

ほんの一瞬、心が動いた。

その時、携帯電話が鳴りはじめた。ノージョーの番号からだ。パンドラははっと我に返り、夢から覚めたように携帯を耳に当てた。

『パンドラ。悪いけど至急、戻ってきてくれないかな。明日のことでちょっと話したい』

「うん、いいよ」

『すまん。せっかく秋葉原に遊びに行ったのに』

「いいんだ。もうけっこう回ったから」

それに。と言いかけて、パンドラは口をつぐむ。ノージョーのマンションに戻ったら、例のウイルスを作らなきゃ。

ノージョーも知らない、ちょっとした犯罪。

通話を切って駅に向かおうとし　そこで、あの男を見かけた。あの、着物にサングラスをかけたサムライだ。今ごろまでずっとチラシを配っていたのか、道路脇に置いた段ボールの空箱を、せ

つせと畳んでいる。そのあたりには、受け取った客が捨てていったらしいチラシが何枚も散らばっていた。全部　白だった。緑の紙は、一枚も見当たらない。

パンドラは、心を決めてサムライに近づいていった。ニッポンCIAだか、秘密結社だかなんだか知らないが、とにかくここまで来て事情を知らないままでは帰れない。

「あいつ」

日本語で話し掛けると、相手がびっくりしたように振り返った。

「ああ　はい」

「今日、あなたは僕に緑色の紙をくれましたよね。あれ、どういう意味だったんですか。何にも書いてなかったけど」

これ以上は考えられないほど愚直に質問すると、ぼかんとしてこちらを見上げていたサムライが、はっと気づいたように、箱の中の残ったチラシを手にとってぱらぱらとめくった。

「あつ、あれ、ごめんなさい！　僕、仕切り紙を配っちゃったんですね！」

「仕切り　？」

「ほら、こんなやつですよ」

サムライが、ほらほらと言いながらチラシの中から選りだしたのは、パンドラが受け取ったのと同じ緑色の紙だった。

「百枚単位で、色のついた紙を挟んであるんです。そしたら、だいたい何枚配ったか把握できるじゃないですか。色紙は全部抜いて配ったつもりだったんだけど、うっかり配っちゃったんですね。」

この物語は、2月5日に発売された、「プロメテウス・トラップ」(早川書房刊、福田和代著)のサイドストーリーです。天才ハッカー「プロメテウス」こと能條良明が活躍する、ひと味ちがう電腦戦をお楽しみください！



< 既刊のご案内 >

- 『ヴィズ・ゼロ』(青心社)
- 『TOKYO BLACKOUT』(東京創元社)
- 『黒と赤の潮流』(早川書房)

「プロメテウス・トラップ」サイドストーリー

「パンドラ in 秋葉原」

著者：福田和代

発行日：2010年2月26日

公式 Web: <http://www.fukudakazuyo.com/>

無断での転載はお断りいたします。

ほんと、すみません」

はいどうぞ、と言いながら、みんなに配ったのと同じ、本物の白いチラシを渡してくれる。

本当にすみませんでしたあ、と何度も繰り返しながら、サムライは去った。チラシを握りしめ、呆然としているパンドラをひとり残して。

気を取り直して、チラシを見直した。

(メイド喫茶『天使の卵』 当ビル四階)

メイドコスチュームの若い女性たちが、八人並んで写っている。その中に、わずかに目をつりあげて、むっとした表情のミドリを見つけた。ひとりだけ、まるで怒っているみたいだ。

なんだかあまりにミドリらしくて、思わずパンドラは吹き出した。

(ちえ。まいったなあ)

もらったチラシは、丁寧に畳んで、なくさないようショルダーバッグの底に入れた。

もう会うことはないかもしれないが、大切な旅の記憶だ。

了